

ロバート・ブラウニング
(1812-89)の「異国にあ
って故郷を思う」(1845)
は次のように始まる。

Oh, to be in England
Now that April's there,
And whoever wakes in
England
Sees, some morning, un-
aware,
That the lowest boughs and
the brushwood sheaf
Round the elm-tree bole
are in tiny leaf,
While the chaffinch sings
on the orchard bough
In England—now!

南欧にあって故郷のイギ
リスを賛美する詩人。そこ
にはグランド・ツアーでロ
ーマの古代文明やイタリア
・ルネサンスの精髓に接す
る機会を得た北国の知識人
の、屈曲した郷愁が歌われ
ている。だがこうした望郷
そのものが、すでに詩的な
定型だったことも忘れては
なるまい。ブラウニングの
詩も、ルネサンス期フラン
スの詩人、ジョワシャン・
デュ・ペレー (1522-60)
がローマにあって故郷ロワ
ール峡谷を懐かしんだ、そ
の響きを追慕しているもの
だろう。

Quand revoiray-je, hélas, de
mon petit village
Fumer la cheminée, & en
quelle saison.
Revoiray-je le clos de ma
pauvre maison,
Qui m'est une province, &
beaucoup d'avantage?
Plus me plaist le séjour
qu'ont basti mes ayeux,
Que des palais Romains le
front audacieux,
Plus que le marbre dur me
plaist l'ardoise fine:
Plus mon Loyre Gaulois,
que le Tybre Latin.
Plus mon petit Lyré, que le
mont Palatin,
Et plus que l'air marin la
douceur Angevine.

デュ・ペレーは南国ラテ
ン世界の豪邸や潮の香を疎
み、テーベレ川よりもロワ
ール川を懐かしむ。パラテ
ィノの丘よりも、故郷の小
さな丘陵を、そしてまた、
硬く分厚いローマの大理石

「ああ大和にしあらしかば」
59

「故郷」の発明——翻案詩の技巧が奏でる、近代国民国家の望郷意識

★

よりも、薄く剝離する青灰
の粘板岩で覆われた、故郷
の小邑の粗末な家を好まし
く思う。「いつの季に我は
再び目にするのか」と、デ
ュ・ペレーが望郷の悲哀を
前面に伝えるのに対して、
ブラウニングはもっぱら、
四月の英国の、木々の美し
さと小鳥たちの歌声を誉め
称える。

さて、蒲田泣董 (1877-
1945)の「ああ大和にしあ
らしかば」(1906)は、
ブラウニングの翻案だとす
るのが定説だ(武田紀子氏
の南アフリカ、国際比較文
学会での発表に拠る)。「あ
あ、大和にしあらしかば、
／いま神無月、／うは葉散
り透く神無備の守りの小路
を、／あかつき露に髪ぬれ
て往きこそかよへ、斑鳩
へ」。たしかに、イングレ
ンドを大和に、四月を神無
月へと置き換えて、泣董は
歌い始める。だがブラウ
ニングは「今!」イングレ
ンドに居ることを想う。そ
こには故郷から隔てられた距
離への意識がある。それに
比べて、泣董の慕う大和は
「斑鳩」であり、連想は「百
濟緒琴」から「彩画」へ、
「夢殿」へと誘われてゆく。

「さながら、縋衣の裾なが
に地を曳きはへし、／その
かみの学生 [かくしゃう] め
きし浮歩み、——／ああ大
和にしあらしかば、今日
神無月、日のゆふべ、／聖
ごころの暫しをも、知らま
しを、身に。」

こうして泣董が歌うの
は、もはや届かぬ過去に属
する、古えの法隆寺への憧
れにはかならない。英国の
詩人が直説法現在形に託し
た、帰郷可能な祖国は、明
治日本の詩人によって過去
完了の叙想法へと変奏さ
れ、もはや戻る術もなき古
代仏教文明の栄華への、初
冬の追慕へと姿を変える。
その裏には、二十世紀初頭、
立憲帝政国家の確立とともに、
国民的な思慕の意識を、
斑鳩の里へと収斂させよう
とする動きがあった。蒲田
泣董の「浪漫」も、近代的
愛国心の涵養と無縁ではな
い。

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美